



最弱職の初級魔術師 1

初級魔法を極めたら
いつの間にか「千の魔術師」と呼ばれていました。

Q

L

P

H

Q

L

I

G

H

T

カタナヅキ *KATANADUKI*



アルファライト文庫

◆ロップス◆

サイクロップス。おじな大人しい性格で、
人を襲うことはまずない。

◆謎の美女◆

妖しい色気を漂わせる
美女。なぜかカルノに
興味を持っている。

◆コトネ◆

冒険者ギルドに
所属するA級冒険者。
情報収集が得意。

◆ルノ◆

勇者召喚に巻き込まれて、
異世界にやってきた
平凡な高校生。ショボい
「初級魔法」を駆使して、
危険な異世界を
生き抜こうと奮闘する。

◆スラミン◆

スライム。
水や氷が大好物。
魔石も食べる。

◆CHARACTER◆

霧崎ルノは、目の前の光景に呻^{あぜん}然としていた。

先ほどまで教室にいたはずである。それにもかかわらず彼は、見たことのない異様な場所に立っている。

ルノの側^{そば}には四人のクラスメイトがあり、彼等もまた同様に戸惑^{とまど}っていた。

ルノ達を問うように、黒いローブに身を包んだ不気味な集団が佇んでいた。手に杖を携^{たずさ}えたその集団は、ルノ達にどこか不審^{ふし�ん}げな視線を向けつつ話し合う。

「おおつ、まさか成功するとは……」

「信じられぬ。異世界の住民を呼び寄せたというのか」

「しかし、全員子供ではないか。本当に戦えるのか?」

しばらくして一人の老人^{こうか}がルノ達に近づいてくる。

その老人の格好は特別に豪華^{こうか}であり、歴史の教科書に出てくる中世の王族のようだった。

ルノのクラスメイト達が次々と声を上げる。

「だ、誰ですか、貴方達は!?」

「さ、聴君……」

「な、何だよ、てめえらつ!!」

「お、落ち着きなさいよ……」

性えるルノのクラスメイトに対し、老人は人懐っこい笑みを浮かべると、突如として

跪いた。そして仰々しく告げる。

「よくぞ参られた、勇者殿。どうか我等をお救いくださいされ」

「え?」

状況が掴めず、クラスメイトの一人が声を上げる。動搖するクラスメイトをよそに、一人冷静なルノが初めて声を発した。

「……勇者?」

ルノは、老人が口にした「勇者」という言葉に引つかれを感じた。またそれに加えて彼は、このシチュエーションに覚えがあつた。

ルノが思いだしたのは、子供の頃に遊んでいたゲームである。

彼は、異世界を訪れた勇者が世界征服を企む悪と戦う、というストーリーのゲームをよくやっていたのだ。今の状況はまさにそういったゲームの展開そのままだつた。

ルノはまさかと思いながらも、自分がゲームの世界を訪れてしまつたのではないかと考える。
そして、どうして自分がこのような状況に至つたのか、記憶をゆっくりと掘り起こしていった。

× × ×

霧嶋ルノは、白鐘学園高等学校に通う高校一年生である。

その日彼は、帰宅中に忘れ物をしたことを思いだし、教室に戻つた。教室には、四人の生徒が残つていた。彼等はクラスでも目立つてゐる男女四人組で、全員が幼馴染同士である。

一年生にして野球部のレギュラーに選ばれた、佐藤聰。

クラスの女子の中でも一番人気がある、花山陽菜。

委員長としてクラスをまとめ、鈴木麻帆。

不良生徒として、ある意味で一番悪目立ちしている加藤雷太。

仲良さうに話しあむ四人とは対照的に、ルノは彼等の顔くらいは知つてゐるもの、ほとんど交流したことがなかつた。

実際に彼等のほうも、ルノが教室に入ってきたことに反応を示さなかつた。

「霧崎じやねえか。どうしたんだ、こんな時間に？」

「ちょっと忘れ物をして……そつちはまだ残つてたんだ」

ルノはそつとうにしつつ自分の机へ行き、置き忘れていた教科書を取りだす。そして返答も聞かずに、そのまま去ろうとする。

「あ、いけない!! もうこんな時間じゃない!? すっかり話し込んでいたわね」

クラス委員長の鈴木の言葉を背に受けつつ、ルノが教室を出た直後——異変が生じた。

「な、何だ!?」

「ま、眩しいよつ!?」

「これは……!?」

「あ、足が動かないわ!?」

四人の足元に魔法陣のような紋様が浮かび上がつてゐる。すでに教室の外にいたルノもその光を浴びてしまつた。

突然、魔法陣から凄まじい閃光が放たれ、教室全体が光に包まれた。

そして全員が意識を取り戻すと、先ほどの状況に陥つていた。

× × ×

果然とするルノ達の前に、さつきとは別の初老の男が近寄つてくる。その初老の男は、ルノ達に声をかけた老人に話しかける。

「皇帝陛下、どうやら勇者様は混乱しているようです。ここは私が説明いたしましよう」

「おお、そうか。頼むぞ、大臣」

どうやら最初の老人は皇帝で、今やつてきた初老の男は大臣らしい。

「まずは自己紹介から始めましょうか。私の名前はデキンと申します。そしてこちらの御方が、バルトロス帝国の皇帝、バルトロス十三世様でござります」

「デキンと名乗つた男はそう言うと、優しげな笑みを浮かべた。

「バルトロス?」

「帝国つて……何言つてんだよ」

「そんな国の名前、聞いたこともない」

ルノに続いて、不良の加藤、委員長の鈴木が声を上げる。すると、デキンは意味深な笑みを浮かべる。

「当然ですな。何しろ、ここは勇者様が住んでいた世界ではないのですから」

「はあ？ 何言つてんだおっさん……頭おかしいのか？」

加藤はそう言うと、睨みつけるようにデキンに顔を近づける。するとすぐさま、デキンの周囲にいた男達が怒りだす。

「大臣に何て言葉を!!」

「ば、馬鹿っ!!」

「かわらず冷静なままデキンに向かつて質問する。

「すみません。結局、ここはどこなんですか？ まさか、異世界だつたり……」

「はあ？ 何言つてんだよ、霧崎」

「急に奇妙なことを言いだしたルノに、加藤が馬鹿にするように声を上げた。デキンは目を見開き、ルノのほうへ顔を向ける。

「おおっ!! そちらの勇者様は理解が早いですな。先ほど申し上げた通り、ここは勇者様の住んでいる世界ではありません。我々は勇者様の世界を『テラ』と呼び、我々の世界のことは『マルテア』と呼んでいます」

「テラ……マルテア……？」

ルノはよく分からぬまま、デキンの言つた単語を復唱する。

野球部レギュラーの佐藤がデキンに尋ねる。

「そ、そんなことよりも、僕達を呼びだしたと言つていましたが、どうしてこの場所に呼び寄せたんですか？」

「勇者様の疑問はもつともですね。なぜ呼びだしたのか……端的に言えば、貴方達に我々を救つてほしいからです。今現在この帝国は、魔王軍と呼ばれる軍勢に追い詰められ、窮地に立たされています」

デキンの発言に、その場は静まり返る。

「ま、魔王だと？ 馬鹿じやねえのかこいつ」

「加藤!! 欧前は静かにするんだ!!」

挑発的な態度を取る加藤に周囲の視線が集まつたので、佐藤が加藤を止めに入つた。ルノはデキンに質問する。

「魔王軍……というのは何なんですか？」

「人類と敵対し、自分達の欲望に忠実な悪のことですな。奴等は帝国の領地内で暴れ、民衆を恐怖に陥れています」

「それで、どうして俺達を……そのテラの世界から呼び寄せたんですか？」

「もちろん、勇者様方に魔王軍の討伐をお願いするためです。奴等は非常に手強く、我々の力だけではどうしようもありません。ですが、この帝国には古から伝わる魔法が存在

するのです！ それこそが、勇者という強大な力を秘めた存在を異界から呼び寄せる召喚

魔法陣！ 貴方達は選ばれた人間なのです!!

感極まつたように、デキンは言い放った。

加藤と花山が呆れて声を漏らす。

「何言つてゐるか、全然分からねえ」

「私も……」

ルノも啞然としてしまつたが、気を取り直して尋ねる。

「あの……俺達は元の世界に戻れないんですか？」

「ご安心くだされ。魔王軍を討伐することができれば、皆さんを帰してあげましょう」

「帰してあげるつて……」

ルノはデキンの物言いが引っかかり、表情を強張らせた。デキンはそんなルノの反応を気に留めることなく続ける。

「さあ、つまらない話はここまでにしましょう。これから皆様のステータスを確認するための儀式を行います。こちらへどうぞ」

「ちょ、ちょっと待ってください!! いつたい何を言つて……」

デキンはルノの言葉を無視すると、振り返つて部下達に指示する。

「お前達、早く勇者様を儀式の間へ案内しろ!!」

「「はっ!!」」

すると、無数のローブ姿の男達がルノ達五人を取り囲んだ。ルノ達は逆らうことができず、強制的に移動させられていく。

ルノ等は嫌な予感を覚えつつも、ただ従うしかなかつた。

× × ×

数分後、ルノと他の四人は、黒いローブ姿の集団に囲まれて廊下を歩いていた。

先ほどまで彼等がいた場所は、玉座の間と呼ばれる広間だつたらしい。またルノ達は、自分達が今、大きな城の中にいると知らされる。

廊下では、甲冑姿の兵士やメイド服姿の女性と何度もすれ違つた。それでも五人は、これまでいた世界とは別の世界を訪れていると信じていなかつた。

しかし、彼等は現実と直面させられる。

ふと気配を感じ、全員が窓の外に視線を向けた瞬間——明らかに鳥ではない巨大生物が空を飛んでいたのが目に入ったのである。

それは、ファンタジー世界で最も有名な存在、ドラゴンだった。

「オオオオオオオオオオオオオオオツ……!!」

全身白い鱗に覆われた巨大な竜が、翼を羽ばたかせて空を飛んでいる。

受け入れがたい光景に五人は圧倒され、言葉を失っていた。

果然とするルノ達を見て、同行していた黒いローブ姿の男達が誇らしげに言う。
ほんとうのやう

姿を見せる竜種ですぞ!!

「それでも、勇者殿が召喚された今日という日に白銀竜が姿を現すとは……これは吉

加藤、鈴木、佐藤、花山、ルノがそれぞれ口にする。

うそには

まさか……本当に僕達

元いた世界では絶対に存在しえない架空の生物である。そのような生物を自分達の目で

見が以上 これが自分達の住んでいた世界ではないと語るしかなかつた

歩を進めながら、ルノは黒いローブの男に尋ねる。

か
?

おっしゃ
はあつ……？ 仰つて いる意味が 分かりませんが……」

「ああ、そういえば

が……本当ですか？」
デキンがわざとらしく大きな声を出したため、他の四人にも聞こえたようだ。四人は魔法と聞いて目を見開いた。

加藤がテキンに尋ねる。

いや、まあ、俺達も魔法を使えるようになるのかよ!!」

マジかよ。信じられねえつ！！

テキンは嬉しそうな顔をする。四人を見て満面笑いを浮かべる。そうして一行はそのまま歩いていった。

移動を開始してから、數十分ほど経過した。

五人が到着したのは、床に魔法陣が刻まれた広間ひろまだった。

広間の周囲には七つの柱が立ち並び、それぞれの柱の上には水晶玉すいしょうだまがあつた。緑、赤、青、黄、茶、白、黒の七色である。

広間の中心には台座だいざがあり、その上では無色の水晶玉が宙に浮かんでいる。

デキンが物々しく告げる。

「ここは、儀式の間と呼ばれている広間です。魔術師だけしか立ち入ることができません。今から勇者様方の適性を検査し、ステータスの魔法を覚える儀式を行います」

「ぎ、儀式？」

ルノが疑問の声を上げると、デキンは不気味な笑みを浮かべて答える。

「怖ふわがる必要はありません。中央に存在する台座の水晶玉に手のひらを翳かざすだけでいいのです。それで皆様は天使の加護かごを授かるでしょう」

「天使の……加護？」

聞き覚えのない言葉を聞き、ルノは首を傾げる。他の四人も戸惑っていると、デキンは説明しだす。

「この世界では成人すると、ステータスの儀式を受けます。これによつて、自分に適した職業、現時点の能力を確かめることができます。そしてそれと同時に、スキルと呼ばれる

技能も身に付けられるのです。さらには、天使の加護を得ることができ、魔法を扱えるようになるのです」

「ステータスとかスキルとか……何だかゲームみたいな話になつてきたな」

加藤が感想を言うと、デキンは笑みを深めてさらに告げる。

「そのゲームというのは何か分かりませんが、今の勇者様は何の力も持つていません。伝承によれば、儀式によつて隠された能力が目覚めるはずです」

普段は冷静な鈴木が、はしゃぐように尋ねる。

「じゃ、じゃあ、私達も本当に魔法が使えるんですか？」

「はあ……それは今言つたはずですが」

デキンは呆れたように、ため息を吐いた。

デキンの態度が段々悪くなってきたことに、ルノ達は違和感を覚えだす。

ともかくデキンの言葉が事実ならば、儀式を受ければ魔法を扱えるようになるらしい。伝ルノは意を決して、最初にやつてみることにした。

「……ここに手のひらを翳かざせばいいんですね？」

「その通りです。さあ、何も恐れる必要はありません」

ルノが空中に浮揚ふようしている水晶玉に近づくと、加藤と花山が心配そうに声をかける。

「お、おい!! 本当にやる気かよ?」

「危ないんじや……」

ルノは覚悟を決めて、手のひらを水晶玉の上にやる。その瞬間、周囲の柱の上の七色の水晶玉が光った。ルノの身体が光に覆われ、周囲の人々が騒ぎだす。

「こ、これは!?」

「すべての水晶石が反応している!?」

「まさか、全属性を扱えるというのか!?」

ルノは、どうして人々が驚いているのか理解できなかつたが、自分の肉体に起きている異変を感じて戸惑う。

熱い液体が注ぎ込まれていくような感覚が全身を襲つたのだ。それと同時に、ルノの左手の甲に奇妙な紋様が浮かび上がる。それは、周囲のロープを纏つた男達が所持している杖のようなデザインだった。

「うわっ!?」

ルノが声を上げると、加藤と花山が心配してくる。

「ど、どうした!?」

「大丈夫なの?」



ない職業だった。

点のレベルや能力だけである。

「職業欄の

「初級魔術師」だ。

それは、ゲーム等でも見たことの

ステータスには、ゲームで定番のHPやMPといった項目はなかった。あるのは、現時

「成長」——経験値を通常よりも高く獲得できる。

・なし

「固有スキル」

- ・火球——火属性の初級魔法（熟練度：1）。
- ・氷塊——水属性の初級魔法（熟練度：1）。
- ・電撃——雷属性の初級魔法（熟練度：1）。
- ・土塊——地属性の初級魔法（熟練度：1）。
- ・闇夜——闇属性の初級魔法（熟練度：1）。
- ・光球——聖属性の初級魔法（熟練度：1）。

- 「技能スキル」
- ・翻訳——あらゆる種族の言語、文字を理解できる。
 - ・戦技
 - ・風圧——風属性の初級魔法（熟練度：1）。

霧崎ルノ

「職業」初級魔術師（固定）

「状態」普通

「SP」1

「レベル」1

「いや……これ、見えないの？」

どうやらルノの視界に現れた画面は、他の人間には見えないらしかった。

ルノは、ひとまず表示されている内容を確認する。

それはゲーム等ではよく見かけるものだった。「ステータス」と表示された画面は、次のようになっていた。

「いや……これ、見えないの？」

ルノはステータスを見ながらデキンに言う。

「あの、画面が表示されたんですけど……」

「それで成功ですな。何が書かれているか読み上げてくれますか？ 我々には他人のステータス画面を確認できないのです。どうか詳細に教えてください」

「私が筆記します」

羊皮紙を手にした男がいつの間にか、ルノの近くにやってきていた。

ルノがステータスの内容を報告している間に、他のクラスメイト達も彼と同様に儀式を行つた。

クラスメイト達が、ステータスを見て驚きの声を上げる。

「おおつ！？ す、すげえ！」

「信じられない」

「まさか本当に」

「えつと……大魔導士？」

デキンがクラスメイト達に告げる。

「皆様も表示された内容をお教えください。修得した職業によつては訓練の内容も変えますので」

「訓練？」

デキンが呟いた言葉に、ルノは反応する。

そこへ、ルノのステータスを書き終えた男がデキンのもとにやってきて、慌てたように羊皮紙を見せる。

「デ、デキン様！！ この者のステータスが……」

「どうした急に……こ、これはっ！？」

デキンは羊皮紙を見て、目を見開いた。そして、羊皮紙とルノの顔を交互に見比べ、ルノのもとに近づく。

「キリサキ殿！！ 表示された画面は、この内容で間違いないと！？」

「は、はい？」

デキンはルノに羊皮紙を見せながら尋ね、天を仰ぐように言う。

「……そんな馬鹿な。どうして天使の加護ではないのだ。伝承では確かに勇者は……」

「デキン様！！ 他の方は確かに天使の加護を受けています！」

そこへ、別の男がデキンに報告してきた。すでにクラスメイトのステータスは調べ終えていたらしい。加藤と鈴木が首を捻る。

「え？ 何の話だよ」

「どうということですか？」

デキンはぶつぶつと呟きながら羊皮紙をぐしやりと握りしめる。そして何か気づいたよ

うに、ルノのほうを振り返った。

「キリサキ殿、貴方が召喚された時の状況を教えてくれませんか!?」

「え?」

「もしかしたらキリサキ殿は……他の方に巻き込まれて召喚されたのでは?」

「クラスメイト達が声を上げる。

「はあつ!」

「ど、どういうことですか? 霧崎君が巻き込まれたって」

ルノは、この世界に召喚された時の状況を思いだしてみた。

魔法陣が出現した際、ルノはクラスメイトの近くにいた。みんなの足元には魔法陣があつたが、自分にはなかつた。それから魔法陣の発する強い光に呑み込まれ、気づくとこちらの世界に降り立つていた。

ルノはなぜか気まずそうな顔をして口を開く。

「まさか……」

「その表情は……どうやら心当たりがあるようですね。ふんつ! ならば話は別だ! 勇者を召喚したはずが、ただの一般人を呼び寄せてしまつとはな」

デキンの口調の変化に、クラスメイト達が驚いて後ずさる。

「な、何だよ、急に……」

「いつたい何がどうしたんですかっ!」

デキンは周囲からの視線に気づくと、慌てて態度を改める。

「おつと……これは失礼。私としたことが冷静さを失つてしまつました。ともかくです。

キリサキ殿は、我々が呼びだした勇者ではないようですな」

デキンがそう言うと、周囲の視線がルノに向かられる。

デキンは不愉快そうな表情のままさらには続ける。

「他の皆さんも見たのでは? 召喚される時、皆さんの足元には魔法陣が浮かび上がつた。ですが、キリサキ殿にはそれがなかつた。

デキンは軽蔑するようにルノを睨み続ける。

「勇者ではないと分かった以上、キリサキ殿の能力は期待できませんな!」

「能力が期待できないって……どういうことなんですか?」

思わずルノが尋ねると、デキンは苛立たしそうに言う。

「ちつ……仕方ないな。いいか、よく聞け」

デキンがルノに教えたのは、次のようないくつかの内容だった。

初級魔術師は希少であるものの、はずれ職である。長所といえば、魔術師の中でトップクラスの魔力容量を持ち、治癒魔導士のように回復魔法を多少扱えること。だが、それ以外のすべての点であらゆる職業に劣るという。

そもそも魔術師は、強力な魔法を使えるからこそ後方支援役として有用なのだが、初級魔術師は初級魔法だけしか使えないため、それが期待できないとのことだった。

「初級魔法……？」

「一般的には『生活魔法』と呼ばれる、普通の人間でも扱える魔法だ。火の玉を生みだしたり、氷の塊を作りだしたりする程度のな！」本来、魔術師は『砲撃魔法』を覚えられたのだ。砲撃魔法こそが魔術師の魔法。初級魔術師はこの砲撃魔法を覚えないと何しろ、初級魔法専門の魔術師だからな！」

ルノはちよつとした反発心から、少し言い返してみる。

「……でも、魔力容量が多いのは良いことなんじゃ」

「初級魔法自体が大して魔力を消費しない生活魔法だ！ セイゼイタバコの火を点ける程度の魔法で、魔力などいらん。そんなもので魔物と戦えると思うのか？」

「……」

「信じられないなら試してみるがいい。ステータスに表示されている魔法の名前を唱えるだけで、魔法は発動できるからな！」

デキンに強い口調で促され、ルノは恐る恐るステータス画面を開く。そして表示されている魔法を確認すると、そのうちの一つを唱えてみる。

「【風圧】

ルノの手のひらから、小さな竜巻（たつまき）が発生した。

その竜巻は、ルノの目の前にいたデキンに襲いかかった。風を受けたデキンは身体をよろめかせ、ルノ自身も体勢を崩して倒れてしまう。

「ぬおっ！ き、貴様っ！」

「うわっ！？」

怒ったデキンが杖を振り上げ、ルノに殴りかかるうとすると、佐藤が止めに入る。

「霧崎君！？」

「いつたい何が……あ、あれ……？」

ルノは地面に腰を下ろしたまま、目を回していた。

「霧崎君、どうしたんだ？」

「大丈夫！？」

「いや、急に身体から力が抜けて……」

佐藤に続いて花山も心配してくる。ルノがぐるぐる回る視界に戸惑いながらそう口にすると、デキンは蔑むように告げる。

「ふんっ、それは魔力枯渇と呼ばれる状態だな。魔力を消耗しすぎると、精神面・肉体面に影響が出てくるんだ。今の魔法を使つただけでそうなつてしまふとは」

ルノはクラスメイト達に手を貸してもらい、何とか立ち上がる。

デキンは嫌味つらしくため息を吐きだすと、小馬鹿にしたような態度を取る。

「はあ……どうやら本当に、ただの一般人が召喚されたようだな。まあいい、他の勇者様を訓練場にお連れしろ。私はこの男を処理する」

「はっ!!」

デキンに指示されて集まってきた男達が、クラスメイトを取り囲む。

「ちょっと、ちょっと待ってください!! 何をするんですか!?」

「くそつ、離しやがれっ!!」

「いやつ、やめてつ、どこ触つてるのよ!?」

「うわああつ!?」

クラスメイト達が大勢の男達に連行されていく。その光景を目にしながら何もできず、ルノは声を上げる。

「みんなつ」

「貴様はこっちだ。おい、この男を城の外に追い払え!!」

一人残されたルノに向かってデキンはそう言うと、見下した態度のまま兵士に指示を出す。

「はつ」

「ちよ、ちょっと!?」

「はつ」

兵士達がルノのもとに駆け寄り、彼を無理やり拘束しようとした時——広間に女性の声が響き渡った。

「おやめなさい!!」

その場にいた全員が、声のほうを振り向く。

そこには、銀色のドレスを纏つた美しい女性が立っていた。また、彼女の側には日本人のような黒髪の女騎士が付き添つている。

銀色のドレスの女性が声を上げる。

「デキン大臣!! これは何の騒ぎですか?」

「こ、これは王女様!! 本日もお美しく……」

「私の質問に答えなさい!! いつたい何をしていたのですか?」

王女と呼ばれた女性は、デキンを責めるような厳しい目をした。

王女は金色に輝く髪の毛を腰元まで伸ばし、人形のようになじみの整った顔立ちをしている。瞳は宝石のように美しい碧眼。胸は大きく膨らんでいるが、腰はキュッと細い。その身体は女性らしい滑らかな曲線を描いていた。

彼女はデキンの側にいるルノに視線を向け、その服装を見て目を見開いた。そして、慌

てて跪きだしたデキンを問いただす。

「この方は？」もしや、今日召喚されたという勇者様ではないのですか？」

「い、いえ。この男は違います！ 本当の勇者様は現在は訓練場のほうに……」

「どういうことですか？」では、この御方は何者なのですか？」

「そ、それは……」

デキンは冷や汗を流し、先ほどまでの高圧的な態度から一変してあたふたしだす。

ルノは戸惑いながらも王女に視線を向ける。そして、彼女に助けを求めて話しかけようとしたところ、先にデキンが口を開いた。

「こ、この人物は勇者様の召喚に巻き込まれた一般人なのです！ ですから、勇者としての力は何一つ持っていないません！」

「一般人……！ どうということですか？」

「じ、実は先ほどこの場所で勇者様全員に儀式を行つたのですが、この男の職業が初級魔術師として」

「初級魔術師？」

「あの不遇職の……」

王女が驚いたような表情を見せ、隣にいた黒髪の女騎士は眉間に皺を寄せる。

彼女達はルノに同情するような視線を向いた。デキンはわざとらしく辛そうな雰囲気を

出しながら口を開く。

「彼が一般人だったことは残念ではありますが、我等としても戦力にならない者をこの王城に置いておくことはできません。そこで、彼には城外で暮らしてもらうよう、話し合いをしていたのです」

「本当ですか？ 私には兵士を使って彼を追いだそうとしていたように見えましたが」

「そ、そんなことはありません」

王女に指摘され、デキンは大げさに首を横に振つて否定した。王女はため息を吐きつつ、ルノのほうへ顔を向ける。

「……その御方、名前は何というのですか？」

「え、あ、霧崎ルノです」

彼女は、ルノを安心させるように優しく微笑みかけ、彼の手を取つた。

「私の名はジャンヌと申します。一つお聞きしたいのですが、こちらの大臣の言葉に嘘偽りはありませんか？ もし彼が嘘を吐いて誤魔化そうとしているのなら、後で罰を与えなければなりませんが」

「お、王女様!! そのような男の話など……」

慌てたデキンが、ルノとジャンヌの間に割つて入ろうとする。しかし、側にいた女騎士が腰の長剣に手を伸ばして、デキンを止める。

「貴公は黙つていてもらおう。それとも、まさか王女様に異議を申し立てるつもりではないだろうな?」

デキンは護衛の女を忌々しげに睨みつけ、悔しげに歯を食い縛つた。

ルノが、このジャンヌならこれまでの経緯を伝えれば助けてくれるのではないかと考えた時——ジャンヌは握りしめていたルノの手を離し、口元を押さえて膝をついた。

「うつ……げほつ、かはつ……!!」

「えつ!!」

「王女様?」

ルノとデキンが呆然とする中、ジャンヌは胸元を押さえて屈み込む。女騎士が駆け寄つて、ジャンヌに肩を貸す。

「大丈夫ですか? まだご病気が」

「へ、平気です……く、こんな時につ……」

ジャンヌはすでに意識を失いかけていた。

女騎士がデキンを睨みつける。

「私は王女様を病室に運びます。デキン大臣! 先ほどの話が本当ならば、そこの御方を城外へ案内し、当面の生活を賄える資金を渡すはずですね!!」

「くつ!! わ、分かつておる!!」

女騎士に厳しく問われ、デキンは反射的に答えた。

「それを聞いて安心しました。さあ、王女様はこちらへ」「も、申し訳ありません……」

黒髪の女騎士は、王女を連れて広間を立ち去つていった。

取り残されたルノは、彼女達の後ろ姿を呆然と見つめていたが、デキンが自分を睨みつけていることに気づく。

ルノが恐る恐る振り返ると、デキンは忌々しげに舌打ちしながら懷に手を伸ばした。デキンが取りだしたのは茶色の小袋である。

デキンは、その小袋を地面に投げつけた。

「さつさと拾えつ!! 王女様のご厚意に感謝しろ。それだけあれば数日は過ごせるだろう。その間に、仕事を探し生き残る術でも探せつ!!」

「えつ?」

「ちいつ……さつさと出でていけ!! ここを真っ直ぐ進めば正門に出て、そこから先は城下町が広がつてゐる。一度とこの城に戻つてくるんじやないぞ!!」

デキンは言いたいことだけ告げると、不機嫌な表情のまま立ち去つていった。

ルノはしばらく呆然としていたが、はつとして我に返ると地面に落ちていた小袋を手に

取つた。袋の中を見てみると、銀貨と銅貨が入つてゐる。
硬貨を見つめながら、ルノはこれまでのことと思い返す。

「いったい何だつたんだ……」

異世界に召喚されたかと思つたら、強制的に奇妙な儀式を受けさせられた。

その儀式で能力が低いと判断され、城の人の態度が急変。城から追いだされかけてしまった。それからなんと王女が現れ、大臣から硬貨の入つた小袋を投げつけられた。そして、自ら出でいくよう指示され……とにかく、短い間にいろいろな出来事が起きた。

ルノはまだ混乱していたが、早くここから出ないといけないということは分かつた。改めて小袋の中身を確認すると、城の正門に向かう。

「これ、いくらぐらいなんだろう？」

小袋の中には、銀貨が数枚と銅貨が十数枚入つていた。

しかし、それぞれの硬貨の価値が分からないので、これでどのくらい生活できるのか判断できない。またそれ以前に、城下町に出てどう暮らしていくべきなのか、まったく想像できなかつた。

デキンは最後に仕事を見つけると言つていたが、ルノは元の世界では普通の高校生に過ぎない。こちらの世界でちゃんとした職を見つけるのかさえ不明だつた。誰かに助けを求めるのが……

ルノはふと気配を感じて周囲を見渡す。

すぐ後に後方から自分を尾行している兵士がいることに気づいた。兵士は一定の距離を保ちつつ、ルノの様子を窺つている。

デキンの指示で、ルノが城を出ていくのかどうか見張つてているのだろう。

これでは助けを求めるのは不可能だ。

人の好さそうな皇帝か、あるいは先ほど助けてくれた王女に会えれば城に残してもらえるかもしれないが……兵士に監視されていては城内を歩けない。

いろいろと考えている間にもルノは歩き続け、王城の城門の前までやつてきてしまつた。門の左右には、見張りの兵士がいる。

兵士はすでに報告を受けていたのか、何も語らずに首だけを動かして、ルノに城門の外に移動するように指示した。

ルノはため息を吐き、歩を進める。

「はあつ……」

ルノが門を潜り抜け終えると、すぐに扉が閉じられた。

本当に、彼を受け入れるつもりはないらしい。

ルノは一度だけ振り返つたが、その場に残つても無駄だと悟り、そのまま城から立ち去つた。

「霧崎ルノ」
 「職業」初級魔術師（固定）
 「状態」普通
 「レベル」1

「どうすれば元の世界に戻れるんだ……」
 彼はそう呟くと、召喚に巻き込まれる直前に見た魔法陣のことを思いだす。
 この世界で最初に訪れたのは、王城の玉座の間である。そこには、皇帝と大臣の他に、
 魔術師と思われる人達がいた。
 彼等であれば何か知っているかもしれない。ルノはそう思いついたものの、それと同時に王城に戻る危険性について考えた。
 ルノは思案しつつ、現状の自分の能力を調べることにした。
 「ステータス」

ルノの目の前に画面が表示される。
 ルノはスマートフォンを操作するように、指先で画面に触れる。このような状況でありながら、気分的にはゲームでもしているような感覚だった。

2

「うん……まあ、分かってはいたけど、日本じゃないな、ここ」
 ルノは城下町の光景を見て、改めて自分がいる場所が日本ではないことを再認識した。
 正確に言えば、日本どころか、自分が知っている世界ですらない。
 彼の前には、頭に獸の耳を生やし、尻から尻尾を生やした存在が歩いている。
 さらには、身長が軽く三メートルを超える巨人、耳が細長い姿の美しい種族などが堂々と行き来していた。どう考えても普通の人間ではない。
 そんな光景を目の当たりにし、ちょっとパニックになつたルノは頭を押さえつつ、人気の少ない路地裏に逃げ込んだ。
 自分がマルテアという異世界にいることは、先ほど王城で教えてもらつたので分かっている。ルノは頭では理解したつもりだった。
 だが、それでもその現実を受け止めきれずにいた。

「技能スキル」

・翻訳——あらゆる種族の言語、文字を理解できる。

「戦技」

- ・風圧——風属性の初級魔法 (熟練度..2)。
- ・火球——火属性の初級魔法 (熟練度..1)。
- ・氷塊——水属性の初級魔法 (熟練度..1)。
- ・電撃——雷属性の初級魔法 (熟練度..1)。
- ・土塊——地属性の初級魔法 (熟練度..1)。
- ・闇夜——闇属性の初級魔法 (熟練度..1)。
- ・光球——聖属性の初級魔法 (熟練度..1)。

「固有スキル」

- ・なし

「異能」

- ・成長——経験値を通常よりも高く獲得できる。

「あれ？ 熟練度が上がってる。あ、さつき魔法を使つたからかな？」

初めてステータスを見た時『風圧』の熟練度は1だったはずだが、2に上昇していた。

ルノはさつそく試してみようと思い、手のひらを前に構える。そして先ほどのように『風圧』の魔法を発現させてみる。

『風圧』!!

吹き飛ばされないように気をつけつつ、手のひらに意識を集中させると、さつきよりも強い『風圧』を生みだせた。

「ん？ あんまりきつくない？」

王城で『風圧』を発動させた時は、立てなくなるほど疲労感に襲われたが、今回はそ

うした感覚はなかった。

熟練度が上昇したことが関係しているのだろう。ルノは深くは考えず、そう納得することにした。

「他の魔法はどうなんだろう」

それから彼は、画面に表示されていた初級魔法をすべて試していくつた。

「『火球』……おおつ」

手のひらから火の玉が現れる。火の玉は自分の意思で自由に動かすことができた。『風圧』と比べて長時間の発動が可能で、数十秒は保たせられるようだ。

「次は……『氷塊』」

彼の手元に、宝石のように輝く氷の塊が生まれる。

この『氷塊』も『火球』と同様に操作でき、大きさも変えられた。大きくしたり複雑な形にしたりすると、多くの魔力を消費するらしい。

『氷塊』の操作で遊びすぎてしまい、ルノはちょっとふらついてしまう。休憩を挟んだ後、四つ目の魔法に挑む。

「ふうっ……よし！ 『電撃』 !!」

魔法名を唱えた直後、手のひらに電流が迸った。

ルノは手のひらに現れた電流を見て感心しつつも、自分が感電しないことを不思議に思う。『そういえば今までの魔法もそうだったな。身体に触れても何も起きなかつた』

実際に、『風圧』で手を切つたり、『火球』で火傷したり、『氷塊』で凍傷になつたりすることはなかつた。

彼は、唱えた魔法で自分自身は傷ついたりしないのではないかと考え、試しに電流を發していないほうの手で電流に触れてみる。

思った通り痛みは感じなかつたが、電流がルノが着ている学生服の上を走り、バチバチ

と火花を散らす。

「あちちつ！ ああ、少し焦げた」

学生服の袖が軽く焦げてしまつた。

ともかく、自分が生みだした魔法では自分の肉体は傷つかないようだ。ただし、装備している物に関してはその限りではないらしい。

続いて、ルノは土属性の初級魔法を唱える。

「『土塊』 !! あれ……『土塊』？」

だが、魔法が発動する気配はない。

不思議に思った彼は、ステータス画面を開いて『土塊』の項目を読む。土に関係する魔法ということは知っているがそれ以上のことは分からない。

ルノはふと思いついて、地面に手のひらを置いてから再び唱えてみた。

「『土塊』」

手のひらから紅色の光が放たれ、前方の土砂が盛り上がる。その一方で、手前の地面が軽く沈んでいった。

「今までの魔法と比べると、何だか地味だな」

そう言いつつもルノは、地面を陥没させて落とし穴を作つたり、地面を盛り上げて土壁を作つたり、意外と便利そだだと考えた。